



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	貧困調査のクリティーク（1） 『豊かさの底辺に生きる』再考
Author(s)	宮内, 洋; 松宮, 朝; 新藤, 慶; 石岡, 丈昇; 打越, 正行
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 120: 199-230
Issue Date	2014-06-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/56433">http://hdl.handle.net/2115/56433</a>
Right	
Type	bulletin (article)
Additional Information	



Instructions for use

# 貧困調査のクリティーク(1) —『豊かさの底辺に生きる』再考—

宮内 洋\* 松宮 朝\*\* 新藤 慶\*\*\*  
石岡 丈昇\*\*\*\* 打越 正行\*\*\*\*\*

**【要旨】** 本稿は、久富善之編著『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』（青木書店、1993年）を現在の研究視点から見つめ直したクリティークである。この共同研究は1980年代後半から1990年代初頭までの「バブル」の陰に隠れた日本社会の貧困をめぐる、北日本のB市A団地における調査をもとに、「貧困の再生産」や「剥奪の循環」といった定型像を打ち破ることを目指した意欲的なものである。では、この目的は実現されたのだろうか。この点について、「〈生活-文脈〉理解研究会」全メンバーが、認識枠組み（レンズ）の問題、調査における自己言及的なフレキシビリティ、青年層の理解、学校および教師に関する問題、住民のコミュニケーションなどについて各々の専門領域から検討し、定型像の押しつけや調査の方法論的限界という点を批判した。その上で、上掲書に内包された将来への可能性、そして今後の貧困をめぐる実証研究の方向性の提示を試みている。

**【キーワード】** 豊かさの底辺に生きる、貧困調査、学校「不適応」、公営住宅、〈問題者発見レンズ〉

## はじめに

社会心理学領域では「確認バイアス (Confirmation bias)」としてよく知られているように、人間は自分自身の仮説にうまく合った情報しか見聞きしない傾向が強い。乱暴に書いてしまえば、人は見たいものしか見ずに、聞きたいことしか聞かないのだ。

例えば、「日本人は集団主義的である」という説がある。高野陽太郎(2008)は丁寧にこの説を解体したが、今なお多くの人たちに根強く支持されているように見える。このような仮説、あるいは思い込みを持っていると、「日本人」(「日本人」とは誰かという問題がそもそも難解だが)による「集団主義」的に映る行動しか印象には残らず、それに合致しない行動は知らぬ間に捨象されてしまうというわけである。だから、科学的には否定されたような、根拠の乏しい説も消えることなく、今なお支持され続ける。「B型の人はいペース」といった「ABO式血液型性格類型」などはその最たるものだろう。

研究者であれば、確認バイアスに陥らぬように細心の注意を払うのは最低限の行為であろう。社会調査やフィールドワークをおこなうにあたって、いくら最新の機器を装備し、最高級のレンズを磨いて見たとしても、それによって映し出された像は、上記の確認バイアスに無自覚であるならば、現実社会の一部を表象していると言えるのかもしれないが、その像は現実社会とはほど遠い、かなり歪な像になってしまっている可能性は高い。ましてやレンズの前にヴェールがかかっていたために何も見えない状態であった際に、当の本人が「像が見えた」と主張するならば、その像はもはや想像力の産物と言わざるを得ないだろう。

\* 高崎健康福祉大学人間発達学部准教授 \*\* 愛知県立大学教育福祉学部准教授

\*\*\* 群馬大学教育学部准教授 \*\*\*\* 北海道大学大学院教育学研究院准教授 \*\*\*\*\* 社会理論・動態研究所研究員

さて、本稿は、久富善之編著によって青木書店から1993年に出版された『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』を現在の研究視角から見つめ直したひとつのクリティックである。1980年代後半から1990年代初頭までの期間、株式や不動産を中心に高騰し、「バブル経済」と称されていた。日経平均株価にいたっては1989年12月に38,915円まで上昇し、マスメディアでその狂乱ぶりが喧伝されていたように、好景気に人々は浮かれていた。しかし、日本社会全体が浮かれていたわけではない。この「バブル経済」の恩恵を被っていたのは、不動産などの資産を持つ一部の者に限られていた。このような一部が「バブル」などと浮かれていた日本社会では、一方では貧困に苦しむ人たちも大勢いた。1987年1月に札幌市白石区の市営住宅の一室で30代の母親が貧困の中で餓死しているのが発見されている。このようなバブルの陰に隠れた日本社会の貧困をえぐり出した調査研究があった。それが、上掲書の久富善之を中心とした調査グループによる力作『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』である。

その内容は、序章の「階層分化と学校システム——その底辺をみつめて」と4章「学校から見えるヴェール一重——教師・学校にとっての生活困難層」は編著者である久富善之が、1章「孤立する生活困難層——その労働と親子関係」は田沼朗が、2章「家族の子育て・教育ストラテジー——生活困難層の親の願いと苦悩」を山崎鎮親が、3章「生活困難層の青年の学校『不適応』——彼らはそれをどう体験しているのか」は長谷川裕が、5章「地域社会での〈階層化秩序〉と生活困難層——〈うわさの階層構造〉と孤立・敵対のメカニズム」は小澤浩明が執筆しており、終章の「生活困難と学校システム——現状と展望」のみは上記の5名全員で執筆されている。バブル経済末期にその調査がなされ、「日本は一億総中流社会」などというまやかしがまことしやかに流布され定着していった状況に一石を投じた一橋大学の久富善之を中心としたこの共同研究の成果に対して、私たち「貧困のフィールドワーク研究会」改め「〈生活－文脈〉理解研究会」全メンバーが、各々の専門領域から上掲書に挑んだのが本稿である。私たちは、上掲書のその現代的な意義を検討しながら、今後の貧困研究の方向性を探るひとつの企図とした。

上掲書は、当時の貧困の「定型像」を打破しようとした実証研究の力作であることは言うまでもない。だが、今改めて見直してみると、久富たちの当初の目的の通りに貧困の「定型像」は果たして打破されたのかどうかについては疑問が残る。なぜ本稿の冒頭で確証バイアスについて述べたのかは、本稿が進むにつれて明らかとなってくるだろう。筆者自身は上掲書を読んだ際にある種の懸念が浮かび、本研究会で何度も議論を重ねることにより、その懸念は確信へと変わっていった。久富の研究グループがその調査によってつかんだことは何だったのか。本稿を通して、それらについて説明していきたい。

ここでは、本論に入る前に、本稿の構成について説明しておく。1節では、これまでフィリピン・マニラの都市底辺世界についてボクシングジムの生活誌から迫ってきた石岡丈昇が、上掲書『豊かさの底辺に生きる』における根本的な問題をまず最初に指摘する。端的に述べると、久富グループが自覚していないと思われる認識枠組みに関する指摘である。

次に2節は、この1節を受けて、「臨床発達心理士であり、かつ、社会学的・人類学的研究もおこなっているユニークな研究者である」(原尻 2006:163) 宮内洋が、上掲書における社会調査のみに限定し、その具体的な側面に関する問題点を指摘する。さらに、社会調査における調査者の痕跡を消去するのか否かをめぐる問題から、これからの貧困調査について考察する。

3節は、打越正行が上掲書における青年層の理解について指摘する。打越は、暴走族の「パシ

り」となり、青年層を対象としたフィールドワークを今なお続けている(打越 2014予定)。このようなフィールドワークはこれまでも、そして今後もなされることはほぼないであろうが、そのような打越ならではの指摘は、青年層と日常生活をともにする者にしかわからない知見に裏打ちされている。

次に4節は、地域社会と教育の関連をテーマとし、在日ブラジル人の教育問題や住民運動に伴う地域社会変動などを調査研究してきた新藤慶が、上掲書における学校および教師に関する問題を指摘する。焦点化されるのは、「生活困難層」とされる子どもたちを「正視」しようとし、ない教師の実態についてであるが、新藤によって、「正視」しようとしなかったのは一体誰なのかということが明らかとなる。

5節は、東海地方の公営住宅における外国籍住民の増加や、高齢化にともなう地域変容をテーマに調査研究を続けてきた松宮朝が、上掲書における地域に関する問題を指摘する。上掲書における地域とは、これまでの政治経済的な地域構造ではなく、上掲書では小澤浩明が「うわさの構造」として提示したものである。この小澤による箇所は、当時としても斬新な切り口であったために、上掲書の中でも現在もなお特に引用され続けている。松宮は、住民のコミュニケーションに焦点を当てた分析から、地域における「共同性」に関する議論を展開する。

最後に6節では、5節に引き続いて松宮朝が、上掲書の問題点を改めてまとめるとともに、上掲書に内包された将来への可能性、そして私たちが貧困の実証研究において引き継ぐべき点が指摘されている。(宮内)

## 1. 貧困追認の貧困調査

### 1. 1 道徳的追放

貧困の社会学研究は、貧困線の算出や最低賃金の変遷といった経済学的・社会政策的位相ではなく、そうした経済的困窮によって構成される社会生活の位相に照準する。貧困にかかわる言動は、貧困を低所得として捉えるものと、貧困を排除として捉えるもの大きくふたつに分けられるが、貧困の社会学研究は圧倒的多数が後者の視角に立つ。2000年以降、欧州由来の社会的排除論が紹介され、日本の社会学界でもそのフレームを援用した貧困研究が多数生み出されたのは、それが貧困を社会生活の位相で捉える社会学研究の特性に見合っていたからである。

こうした特性を踏まえるならば、貧困の社会学研究は経済学的・社会政策的貧困論とは異なる貧困の様相を開示する必要がある。家族研究へと接続していくのはひとつの潮流であったが、もうひとつの潮流は貧困と絡む道徳について批判的に考察するものだろう。

筆者はフィリピン・マニラの都市下層について調査研究をおこなってきている。日本とは地理的に離れ社会制度的に異なった社会であるが、しかし貧困者に対する道徳的糾弾は、両国に共通するよう思える。貧困の自己責任化が見られる一方で、貧困者に施しを与えるという慈善的救済もまた頻繁に見聞きする。貧困地区を歩きながら、貧しさを自らの能力不足と受け入れる人びとに出会ったり、野宿生活を余儀なくされている人びとに「この人たちも本当は良い人なのよ」と語る隣人などに遭遇してきた。マニラにおいても、貧困者には、何故に貧困

であるのかを道徳面と絡めて説明する義務が課されているかのごとくである。この道徳的弁明を強いる仕組みこそが、ひとつの強力な排除の形式であることを確認しておこう。マニラの貧困地区を歩きながら痛感したのは、貧困が物質的欠如に加えて、「象徴的剥奪」(Wacquant 2008:169)をもたらすことだった。貧困の社会学研究は、この象徴的剥奪をもたらす道徳にこそ、批判のメスを入れる必要がある。

## 1. 2 〈問題者発見レンズ〉

『豊かさの底辺に生きる』を貧困の社会学研究の土俵に沿って検討する上で、以上のよう論点を書いたのは、本書もまた貧困を撃つことを目指しながらも、結果として貧困を作り出している当の条件やイデオロギーを追認していると思われる箇所が散見されたからである。

本書は、80年代後半、バブル崩壊前の日本に存在する「社会の底辺」の姿を、地方都市の団地居住者から描出したものである。さらに、学校論の視角から、バダゴギックな営みが、生活困難層の生徒を包摂するのではなく排除する顛末も指摘している。学校システムの包摂機能が不十分だから生活困難層が社会的孤立するのではなく、学校システム自体が生活困難層を孤立させる仕組みを内包しているというのである。「子どもたちの成長・発達を図ろうとする意識的営み…のなかに『再生産』の働きが浸透しているのだ」(p.10)<sup>1</sup>。副題にあるように「学校システムと弱者の再生産」がひとつの大きな議論軸である。

久富らはこうした理論モデルを携えて実証調査に入るのだが、しかしながらその事例箇所には驚くべき記述を含んでいる。一例をあげれば、1章の「母子(父子)家庭、傷病・障害者家族、中国引揚者家族の基本属性・生活状況」という表である(pp.32-5)。各家族・家庭(本書では「家族」と「家庭」が概念的に腑分けされておらず、第4章でも「よき家族」と「よき家庭」という言葉が分析のキーワードであるにもかかわらず一区分無く用いられている)の状況を羅列した本表には、「離死別・別居の有無」という項目がある。「離婚」や「別居」などの各家庭・家族の状況が記されているが、注意したいのはたとえばI-1にある「離婚 女遊び」という表記だ。なぜ、この家族にのみ「女遊び」が表記される必要があったのか。同じことは、I-3「別居 妻の浪費」、I-6「離婚 酒乱」、I-7「離婚 アルコール」(「酒乱」と「アルコール」がどう異なるのかは不明)にも当てはまる。ここで付記されている「女遊び」、「妻の浪費」、「酒乱」、「アルコール」は、いったいいかなる情報として読者に差し出されているのか。

また、この表の備考欄も目を引くものだ。雑多な内容が雑多なまま記述されているが、拾ってみるならば、「長女、てんかん」(P-5)、「長女、神経性胃潰瘍」(I-3)、「創価学会」(I-6)、「霊波の光」(I-10)、「長男は重複障害者」(I-17)、「夫、妻の学歴は高卒」(I-18)、「家の中散乱」(II-1)、「水商売」(II-2)。備考欄のこれらの記述は何を意図して、あるいは非意図で、書かれているのか。「創価学会」と「家の中散乱」と「水商売」は、いかなる方法によって並列化されているのか。

筆者には、本書の記述の問題性が、ここに凝縮して現れているように思える。理論モデルに反して、具体的記述が無方法なのだ。著者たちの意図がどうであれ、備考欄に「創価学会」と「家の中散乱」と「水商売」と並記する背後には、著者たちが聞き取りの対象者を「問題者」として一括認識している構えが見て取れる。この「問題者」視線が聞き取りに先立って存在し、この視線に沿って著者たちにとっての特別現象である「創価学会」「家の中散乱」「水商売」が拾われてくるのだ。

備考欄に記された雑多な諸現象が、雑多なままで並記されることを可能にするのは、久富らが無自覚に掛けた〈問題者発見レンズ〉とでも呼べるものの効果によってであろう。ここで筆者が〈問題者発見レンズ〉と呼んだものは、経験的事実に先立って、「問題者」が誰であるかを恣意的に発見し同定するレンズのことを指す。「創価学会」と「家の中散乱」と「水商売」をわざわざ並記する久富らは、当初より調査対象者を「問題者」という括りでしか捉えていないのである。久富らは、個別具体的な歴史的存在としての話者に向き合っているのではなく、自分たちの〈問題者発見レンズ〉によってでっち上げられた「問題者」と向き合っているにすぎないのである。

あるいは、インタビューではなく尋問をおこなったと言ってもよい。インタビューは個別具体的な話者の語りから物事の考察を開始する営みであるのに対し、尋問は当初から話者を「問題者」と決めつけそれを証明する事柄のみを拾い上げることに躍起になる営みである。離死別欄に記された「女遊び」、「妻の浪費」、「酒乱」、「アルコール」という表記に戻ろう。警察の調査に書かれそうなこれらの記述からは、本書が尋問に近い調査によるものである点がわかる。それでいて著者たちは「彼らの生活と願いの真実」(p.229)に踏み込もうとしたと言う。いくら調査が継続されようとも、それが成就されることはないだろう。

このように見てくることでわかるのは、本書は生活困難層とされる人びとの労働と生活と学校との関わりに肉薄しようとするよりは、著者たち自身の認識枠組みを一貫して保持した上で調査対象者の声を裁断していることだ。貧困者の暮らしに迫るには、まず調査者の認識枠組み自体を問い直すことから調査を開始する必要がある。調査者の無自覚な認識枠組みは警察のそれと同類であることがあるのだ。理論モデルを洗練させたところで、調査過程の細部が注意深くなければ、貧困を撃つはずの貧困研究が当の貧困の再生産に手を貸すことへとつながってしまう。著者たちの〈問題者発見レンズ〉こそが、貧困者を道徳的に糾弾する鞭になっている。「対象としてとりあげているつもりの対象に捕われてしまった科学活動」(Bourdieu & Wacquant 1992 = 2007:292) とは、本書のような著作のことを指すのだ。

### 1.3 「劣者」の位置を押しつける社会記述

こうした著者たちのレンズは、別水準でも弱者の再生産に手を貸している。第1章から拾っておこう。死別母子家庭の母親は「彼女たちの必死のがんばりによって家族を支えている」(p.38)。著者はこう続ける。「これに対して」(p.38) 離別母子家庭の母親は生活保護を受給していることが述べられている。

この数行から見て取れることは2点ある。第1に「がんばり」という概念が、支配的秩序と同調しかねないこと。第2に、「これに対して」という文言が示すように、死別母子家庭に対して離別家庭を道徳的に劣った存在と措定する視線である。死別母子家庭が必死のがんばりによって家族を支えていると記述するのであれば、その裏側にはがんばっていない家庭もあることが前提になっている。だから、「これに対して」という文言がすぐさま必要となるのだ。「これに対して…離別母子家庭のうち…一五ケースが生活保護を受給していた」(p.38)。離別母子家庭で生活保護受給家族は「がんばり」とは対照的な否定的存在と据え置かれている。

「がんばり」という概念で記述をおこなうことは、貧困研究の大きな争点である貧困者の選別をめぐる議論へと突っ込むことでもある。これまで幾度も繰り返されてきたように、貧困政策の大きな課題のひとつは「救済に値する貧困者」と「救済に値しない貧困者」の選別を政策に

内包してしまう点である。具体的には、生活保護を受給せずに「がんばって」働いている者は政策的に救済されるべきで、生活保護を受給し続ける者は道徳的に怠惰で政策的に厳しく対応するべきという図式などに典型的である。だが、このように貧困者を選別すること自体が、貧困者に肉薄した地点から発せられる要請ではなく、貧困者を統治するための技法ではなかったか。西村貴直の議論を引いておこう。

「救済に値する」貧困者は、裕福な人々の同情や憐みの感情、博愛の心を刺激するのであり、それは彼らが何らかの援助を提供しようとする動機づけとなる。(西村 2013:236)

西村はここから貧困の「積極的機能」を論じている。なぜ、貧困は撲滅されるべきであるのになくならないのか、それは貧困が社会体制を維持する上での「積極的機能」を備えているからだというのが、西村の議論の骨子である。そのなかで、上記の文章を西村は記しているのだ。

このように見てみると、本書での「がんばり」をみせる死別母子家庭と「これに対して」生活保護を受給する離別母子家庭という対比的記述は、まさに本書自体が貧困を生み出す条件のひとつである貧困者の道徳的追放に加担していると言えるだろう。言い換えれば、西村の議論を援用するなら、著者たちの記述それ自体が、貧困の「積極的機能」を留め置く側に貢献しているのではないか。

著者たちは、本書の大きなねらいとして、こう書いていた。「この社会で『下層』『底辺層』とは、単に生活が経済的に苦しいということだけを意味しているのではなく、それよりむしろこの競争秩序における『劣者』『敗者』の位置を押しつけられていることを意味する」(p. 6)。では、誰が「劣者」「敗者」であることを調査対象者に押しつけているのだろうか。他ならぬ著者たち自身によってである、と言えるだろう。(石岡)

## 2. 貧困調査における調査者の痕跡をめぐる問題

### 2.1 久富グループの社会調査のプロセス

本稿の「はじめに」でも記したように、本稿は久富善之を中心とした共同研究グループの労作である『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』を対象に、その現代的な意義を検討しながら、今後の貧困研究の方向性を探るひとつの企図であるが、本節では社会調査の側面に限定して論じていく。

久富グループによる、この研究成果は、どのようにして生み出されたのであろうか。まずは、その社会調査のプロセスを順を追って見ていきたい。

この研究は、「北日本のある都市B市のA団地」を調査対象地とし、「私たちが団地住宅地図からランダムサンプリングしてインタビューした結果」(p.iii)であると記されている。「ランダム・サンプリング」とは周知のごとく、無作為に標本が抽出されるやり方であるが、久富グループによる社会調査は果たしてランダムサンプリングと言えるのだろうか。筆者は疑問を感じる。当該書にも記されているように、この研究は、「ランダムサンプリング」に基づくとき

れる第一次調査(1990年5月)の後に、第一次調査の際に「調査不能・拒否」であった世帯のうち、女性が世帯主である世帯に対して第二次調査(1991年3月)が実施され、その後に第一次調査と第二次調査において面接できた世帯の青年層のみを対象とした第三次調査(1992年3月)が実施され、これらの三つの調査と、それ以前の1989年3月から1990年3月の間に3度実施された予備調査に基づいている。この研究について「ランダムサンプリング」が謳われているわけであるが、これら6度の調査で得られた「ケース」が当該書では混在している。さらには、その第一次調査においても、手続きとして「団地の住宅地図で二つの対象範囲を選び、一〇戸に一戸の割合で無作為抽出した(空き室が当たったときはその隣り(ママ)を選んだ)」(pp.17-8)とされているが、社会調査の基本からすれば、上記の記述通りになされたとなるとランダムサンプリングとは言えない。実質的には「多段抽出法」のほうが近いのではないだろうか。

さらに、久富を中心とした共同研究グループの調査について、調査する者の視点から、時系列的に細かく見ていこう。

まず、このグループのリーダーである久富本人が北日本のB市を一人で訪問したのが1988年2月のことだという。「豊かさ」が喧伝されていた日本社会において、1987年1月に札幌市白石区の市営住宅の一室で30代の母親が貧困の中で餓死しているのが発見された、ほぼ一年後のことである。久富本人においては、大学教員として、札幌市内に位置する北星学園大学、埼玉大学を経て、一橋大学に移籍した後のことであった。その際に、久富は一体何を見て、誰と会い、何を語り、そして何を構想したのだろうか。その後、当該地には「3年間に6度」訪れたと記している。予備調査の段階で、2名の大学教員が参加している。この両名のその後のかわりは記されてはいない。本調査においては、「インタビュアー」として、一橋大学大学院社会学研究科の大学院生が2名と、B市A団地において活動する「セツルメントの学生」たちが参加したとされている(p.v)。「インタビュアー」の人数もその属性に関する記載はまったくなく、調査者側の匿名性もまたかたかく守られている。

当時の社会学領域における社会調査は、調査票を用いた、いわゆる「調査票中心主義」的な社会調査(宮内 2005)が主流であったと思われるが、久富グループにおいては、これらの「インタビューはいずれも特に調査票を用いない自由面接」(p.18)であったという。それは当時の社会学研究としては珍しく、この社会調査においては調査票がなく、「面接者用の『インタビュー・ガイド』は作成したが、対象者が話しやすいことを第一義にしたので、すべてのケースで共通の事項をきくことができているわけではない。録音テープも使用したが、これも対象者の意思を第一にしたので録音のない場合のほうが多くなっている」(p.18)とのことである。そのために、調査結果において、「会話調」と「要約調」のものが混じり合っているとされている。

まとめると、当該書における久富グループの社会調査とは、北日本のある都市B市のA団地に居住する世帯を主な対象として、1989年3月から1992年3月の間に6度実施された、調査票を用いない自由面接と言えるだろう。

## 2.2 久富グループによる社会調査の問題点

今さらではあるが、対面式の聞き取り調査において、調査者はまったくの透明人間であり、誰が調査者であるかに関する影響はまったくないという、ある種の「お約束」を頑なに信じ切っている研究者はもはやかなりの少数派となっていることだろう。かつて拙稿でも論じた

ように(宮内 2005, 同 2010), 生身の人間が生身の人間に対して何事かを尋ね, 話を聞きながら, 対面的な相互作用を重ねていくという状況において, 一方が相手に対して, 同時に, もう一方が相手に対して, まったく影響を与えないということは, きわめて不自然な状態であると言える。素朴に考えて, お互いに相手に対して何らかの影響を与えていると見なした方が自然であろう(さらには, 以前に指摘したように(宮内 2005), どちらかが, もしくは双方が相手に対して恋愛感情を抱くことさえある)。このことを踏まえた上で, 誰が誰に対して話しているのかということ, まず理解しておかなければ, 分析者も, そして読者もまた聞き取り調査の結果を大いに誤読してしまう危険性が高い。

さらに付け加えれば, 現代の社会学を含めた, 質的な研究の領域においては, 聞き取り調査における被調査者は「受動的な回答の容器」(Holstein & Gubrium 1995=2004) などでは決してなく, 生身の身体を持つ生きた人間であり, その被調査者の語りは, その場にいる調査者と被調査者による相互作用の産物として理解することは, ほぼ常識と言えるだろう。

久富たちによるこのB市A団地の調査結果が世に出された頃は, 社会学においては, 先のような見方をする研究者はそれほど多くはなかった。当該書の一冊を通して, 久富たちには上記のような相互作用の産物という認識がまったくなかったかのように論じられている。インタビューがいかなる人物であっても, 被調査者という存在はいつでも尋ねられたことに対しては「一定の正しい事実」を語り続けるという, きわめてナイーブな前提に基づいているかのようである。この点が, 後に論じるように, この研究成果の最終的な結果にひびを入れてしまっていると筆者は見ている。

もう一度, 久富グループの社会調査に立ち戻って考えてみたい。久富グループの社会調査において, A団地で生活する被調査者に実際に会って, やりとりをしているのは誰だろうか。当該書に記述があるのは, 一橋大学大学院社会学研究科の大学院生が2名と, 人数はわからないが, B市A団地において活動する「セツルメントの学生」たちである(通学しているのは大学か短大か専門学校かも不明であり, 学生たちの各々の専門領域にも触れられていない)。詳細はわからないが, 上掲書に名を連ねる久富グループの5名も調査に参加しているかもしれない。

以前に自らの経験したエピソードを記したが(宮内 2005), かつて在籍していた講座のメンバー総出で社会調査に出かけた際に, 一人の高齢者の聞き取り調査においてチームとなった大学生(北海道大学教育学部)の語りの「要約」に驚いたことがあった。同じ人物に話をうかがっているにもかかわらず, 聞き取って, メモしている要約が筆者のものとは大きく異なっていたのである。つまり, その学生の認識枠組みによって, 一人の高齢者の語りが切り取られ, その学生が理解した範囲内において, その学生のボキャブラリーを資源とした表現として文字化されるわけであるが, その結果である「要約」が筆者のものとは著しく異なっていたのだ。しかも, 調査票から外れることは許されない厳密な「調査票中心主義」の社会調査での出来事だ。

ただし, 筆者は, 学生よりも自分自身の「要約」が正しいと主張したいのではない。この点もまた, 社会調査では考えなければならない点である。山田富秋は, 筆者のこの時の態度について, 以下のようにまとめている。

ところが宮内は早急にこの結論に到るのを避けるほど用心深い。当時大学院生であった宮内とこの学部生のどちらが「正しい調査結果」なのだろうか。それを決めるのは, 知識の量なのか, 大学院生と学部生という権力差なのか, あるいは現場での一瞬の感覚なのか。

宮内はそれはわからないという。ただ『解釈のせめぎ合い』がそこで生じていたことは確かだという。(山田 2010:8)

久富グループの調査では、どのような「解釈のせめぎ合い」が生じていたのであろうか。久富グループの調査方法は、調査票を用いない自由面接であり、実際に話をうかがったのは、大学院生と学生となっている。「底辺」と久富善之が名付けた人たちの過酷な人生に基づく語り、学生たちはどれほど理解することができたのだろうか。学生だから“人生の苦しみ”などは理解できないだろうといった稚拙な前提に基づき、表層的な難癖を付けているのでは決してない。例えば、当該書の3章において、その自由面接でのやりとりが「学校へのこだわりの希薄さ」が典型的に見られるとかなり長く引用されているのだが(pp.136-40)、筆者には被調査者たちのインタビューに対するコミットの希薄さのほうに目が奪われた。なぜこのやりとりをあえて掲載したのだろうか。社会調査の教科書には必ず「ラポール」について触れられているが、調査者と被調査者との間にラポールが形成されていたことを疑ってしまいかねないようなやりとりである(このことは前節でも指摘されているように、当該書の中に記載されている、幾つもの表の記述にも感じられる)。被調査者たちが示すのは、「学校へのこだわりの希薄さ」なのか、“この調査への関心の希薄さ”なのか。このやりとりからは判断することができない。しかし、この録音されたやりとりの文字起こしの結果からは、当該書における他の被調査者たちの語りも、実際に生身の人間同士が対面した自由面接の場では誤解されている可能性(さらには被調査者側が詳細を話すことを諦めた可能性)を打ち消すどころか、そのような疑念が増すように思えてならないのである。

### 2. 3 貧困研究における新たな調査に向けて

ここで、サイドによる問題提起を思い出したい。

いかなる制度的・言説的舞台装置の中で、いかなる観衆に対して、いかなる目的を秘めて、いかなる人間がオリエントについて書いたり研究しているのか。(Said 1985:107 = 1986:338)

当然のごとく、この問題提起はオリエント研究のみに閉じられたわけではない。貧困研究においても受けとめるべき重要な問題提起であるだろう。さらに筆者は、社会調査の場面においても同様に考えるべき問題だと考えている。つまり、いつ、どのような場で、誰に対して、いかなる目的を秘めて(あるいは秘めず)、誰が貧困について語っているのかを看過すべきではない。貧困について語るのは、貧困について研究する研究者のみではない。貧困問題の〈当事者〉もまた、自らの生活や感情の吐露を通して、貧困について語っている。

私たちは今一度考えてみるべきであろう。上掲書において各章を分担執筆した久富グループのメンバー(全員男性)はいったい誰であったのか、“いかなる存在”であったのかと。彼らはどのポジションから「底辺」の状況を綴り、分析したのだろうか。補足すると、2012年に同じA団地において実施された調査の研究成果が報告書となって刊行されているが、各世帯に2名の調査者が訪問したという記述が加わり、自由面接ではなく「質問事項を準備した上での半構造化面接」に変わっていたこと以外は、ほぼ前回の調査の結果である『豊かさの底辺に生きる』

時と同じであった。

これらの問題を踏まえ、これからの貧困研究における調査に向けて、興味深いひとつの試みがある。久富とほぼ同世代である乾彰夫を中心にした共同研究である。2002年から2008年にかけて、卒業前の2学期の高校3年生に対して、その卒業後も7年にわたって5回の継続調査をおこなったものだ。調査対象校は、「多摩地区の入学難易度中位のA高校」と「下町の学区で最も難易度が低いといわれるB高校」であり、B高校でのインタビューが可能であった50名のうち、「両親の揃っている家庭に暮らしている」生徒はほぼ半数の27名のみであったという(乾2013)。さらに、B高校の生徒たちの家庭の経済的な脆弱性が進路選択と決定に影響を及ぼしていた。

この乾彰夫を中心とした共同研究の中で特に注目すべきなのは、この共同研究グループのメンバーの一人である上間陽子による興味深い試みである。上間は、先の被調査者たちにおける継続調査に協力し続けている被調査者と途中で調査拒否した被調査者を分析し、その上で前者と調査者側の関係性を分析している。例えば、上間も自分自身について、被調査者たちとのメールのやりとりや、クリスマスカードなどでの郵便物を介した交流、mixiなどのネット上での交流を通じて、「調査期間以外もゆるやかにつながることによって信頼関係が形成された」(上間2013:294)と分析している。

本稿において取り上げている久富グループの社会調査とは対照的なやりとりがある。ある被調査者は、「一九歳のときに一人で自分を産んでホステスをしながら育てた母親を一年前に一人で看取り、住宅の撤去と母親の借金の過払いの整理を終えて祖母宅に身を寄せていた。だが、『死んだのはおまえのせいだ』と祖母から毎晩のように責められ、『このままここにいたら一生いわれる』と祖母の家を離れ、一人暮らしを始めた(上間 2013:298)。その被調査者に対して、乾グループのメンバーである杉田真衣はこのように言ったという。

誰のせいとかじゃないし、あえていうんなら、責任があるんだとすれば、社会で…だって、お母さんだって、一九歳で、一人で〇〇さん産んで。がんばってきたんでしょ。お金がどうしても必要だから借りていたわけで…一人で子どもを育てる女性に、国がお金を出さなかったりとか、給料がきちんととれる仕事がなかったりとか、そういうことが問題であって。そういうことがずっと積み重なってきた中で、お母さんはたぶん病院に行くお金があればもっと満足に行けたかもしれないし。そういうことの積み重ねだから、お母さんも、〇〇さんも、一切、責任はない。(上間 2013:299。ただし名前は引用者が「〇〇」という表記に変えた)

このようなやりとりに対して、「インタビュアーは、母の死はあなたのせいではない、と言い切っている」と上間は書く。このような調査者の発言は、被調査者の人生に踏み込みすぎていて、社会調査の範囲を超えているという批判がなされるかもしれない。このような被調査者に対する力強い発言は、少なくとも久富グループの調査の現場でのやりとりとして、当該書を見る限りでは見られない。被調査者を上記のような「受動的な回答の容器」として見る調査者からは出て来ない力強い発言なのかもしれない。

くどいということは十二分にわかっているが、もう一度書こう。対面的な調査とは、現在の生活とその生活の歴史を背負った生身の人間と、同じように、現在の生活とその生活の歴史を

背負った生身の人間の両者が実際に出会い、互いに影響を及ぼし合う相互行為の場である。調査者が何を述べ、何を述べないのかについては、学会が示す倫理規定に反しない限り、そして、調査チームのリーダーが示した規範に反しない限りは、調査者に委ねられていることであろう。調査者が上記のような発言をしなければならぬわけではない。当然のごとく、被調査者の悲惨な生活を垣間見たからと言って、神や仏などはいないのではないかという惨い人生についての語りを聞いたからと言って、調査者や研究者がその被調査者の人生を背負うことなどはできないだろう。さらに、一生にわたってケアやサポートし続けていくこともまた現実的ではないと言えるだろう。

だが、少なくとも、貧困研究における調査に携わる者は、貧困に対して無関心ではなく、そして貧困に対して無知ではなく、ある種のソーシャルワーカー的な知識と態度が求められているのではないかと、乾グループの継続調査から考えさせられた。そして、筆者らが指摘したように、その社会調査に携わる者は、自己言及的なリフレキシビリティもまた求められていると言えるだろう(宮内・松宮・新藤・石岡・打越 2014)。被調査者を「受動的な回答の容器」として見る調査者は、被調査者の〈生活-文脈〉(宮内 2008)を理解することができず、貧困の実態を見誤る可能性が高いと言えよう。単なる調査方法論に限定される狭い問題ではないのである。(宮内)

### 3. 生活困難層の青年の学校へのこだわりを再考する

ここでは長谷川裕によって執筆された当該書の3章「生活困難層の青年の学校『不適應』——彼らはそれをどう体験しているか」を、簡単に紹介する。続いて、そこで提示されたインタビューデータに基づいて、彼の指摘する「学校へのこだわりの薄さ」について再検証し、その課題と可能性について述べる。

#### 3.1 生活困難層の青年の学校「不適應」

まず当該論文を簡単に紹介する。長谷川は議論の出発点として、生活困難層の子ども・青年の学校「不適應」の集中という事実をおさえる(p.108)。その背景として、高度成長期以降の日本では、「子ども・青年の将来の社会的地位や将来の生計の安定度は、彼らの学校での教育達成のいかん(最終学歴はどこまでか、同じ学歴でもどの程度のランクの学校なのか、など)によって左右」(p.108)され、それは「必ず誰かが振り落とされ敗北していく競争過程を通じて決定される」(p.108)ことを確認する。それゆえに、その競争過程はエリートの地位をねらう一部の人のだけでなく、圧倒的多数の人びとが参入せざるをえない。そのような競争過程は、生活困難層にとって、学校を介した〈貧困の再生産〉のサイクル(親の貧困→子どもの低い教育達成→低い職業達成→貧困)としての意味合いをもつと指摘する。

このような前提のもと、長谷川は「客観的にはこのような意味合いをもつ学校「不適應」を、生活困難層の子ども・青年自身は、どのように受け止めているのだろうか。生活困難層の子ども・青年はその学校「不適應」をどう体験しているのだろうか」(p.109)と課題を設定する。そしてその課題を検証するもとなっているのが、学校から離れた後に「浮遊」する3人の女性

と、その後の世界を積極的に意味付ける6人の青年のインタビューデータである。それぞれの青年は学校を離れた後の態度こそ異なるものの、「(かれらの)〈学校へのこだわりの希薄さ〉という傾向」(p.109)は共通しており、「学校とはそのように自分の将来を賭する重大な場であるという受け止め方は必ずしも強くはなく、むしろ学校とはその時々気分によって行ったり行かなかったりするような場であり、その気分がマイナスの方向に募ったので、そこから離脱した」(p.109)と長谷川は結論付ける。そしてこの結論についてはふたつの解釈が導かれる。ひとつが「競争秩序へのほころびとみる解釈」(p.110)であり、もうひとつが「現在の劣位から脱却しようとする意志までをも剥奪されているという解釈」(p.110)である。長谷川は後者に力点を置きつつも、生活困難層の若者たちによる「挑み」についても検討している。

### 3. 2 調査データから再生産論は展開可能か

長谷川は、生活困難層の若者のインタビューデータをもとに「〈学校へのこだわりの希薄さ〉という傾向」(p.109)が共通していることをみる。そしてそれを「競争秩序へのほころび」(p.110)とみるか、それとも「現在の劣位から脱却しようとする意志までをも剥奪されている」(p.110)状態とみるかといった再生産論を展開する。長谷川は彼らの「挑み」が競争のほころびを生じさせる要因として位置付ける。またその「挑み」のターゲットは「学校等を舞台とした競争を通じて社会的地位が決定されていくという現代日本社会の競争秩序」(p.122)とされる。

ただこのように、「挑み」か、それとも貧困の再生産かという問いを立てれば、そこから導かれる結論は用いる「レンズ」によって異なるといわざるをえない。マクロな構造の変動という「レンズ」を通してみれば、「挑み」はほぼ無力であり単純な再生産といった「定型像」が映し出されるだろう。他方でミクロな意味世界という「レンズ」を通じてみれば、既存の制度などを独自に価値付けながら営んでいる豊潤な意味世界に遭遇するだろう。また両者は相反する概念ではなく、時には「挑み(対抗文化)」こそが(階級の)再生産を下支えするという議論も展開されている(Willis 1977 = 1985)。つまり、「挑み」と貧困の再生産とでは問題の位相が異なるのである。学校へのこだわりについてのインタビューデータを用いて、長谷川の設定する再生産に関する議論を展開するためには、幾重にもわたる段階を経る必要があるように筆者は考える。

少なくとも長谷川の提示する彼らのインタビューデータにおいて、青年らは学校における競争秩序を意識しているようには読み取れない。もちろんそれは彼らの日常生活の隅々に行きわたっていることは間違いないだろう。ただし彼らの生活の場面では現前することはめったにない。むしろそれはインフォーマルネットワークのあり方や生活困難層の家庭内のコミュニケーションを通じて伝達される身体技法や将来展望に刻み込まれて浸透しているものではないだろうか。そこには競争秩序への再生産もそれへの「挑み」もない。彼らの日々の生活と人間関係があるだけである。生活をまわすために使えるものはなんでも使うやり方が彼らのやり方であるかのようにも思われる。以下、彼の提示するデータに沿いながら詳しくみていく。

### 3. 3 調査データを再検証する

長谷川が試みる生活困難層の若者による学校における実践が、既存の社会構造への再生産なのかそれとも挑みなのかといった議論は先行研究の蓄積が存在する(Bourdieu 1970 = 1991, Lewis 1959 = 2003, Willis 1977 = 1985)。ここではそれらの議論のもととなる調査対象者の「学

校へのこだわりの薄さ」について、提示されたデータに即して再検討を試みたい。再検討は提示されたデータのみから慎重に行っていくが、そのための視角は先行研究や筆者の調査経験がベースとなっている。

### 高校中退の少女の事例 (当該書の表記は②, 以下同様)

17歳の少女は、高校2年の秋に高校を中退した。中学2年の時に両親が離婚し、母親は肝臓病を患いインタビュー当時は無職であった。その母と姉の3人で生活保護を受給しながら暮らしていた。また彼女は慢性疾患で病院に通院しており、小学校の時から体調不良によって遅刻・欠席・早退がちであった。学校や勉強はとくべつ嫌ではなかったが出席日数が足りなくなり高校を中退した。母親は彼女が高校をやめると言った際に「父親がいないので、あんまりきついことをいってぐれられたら困ると思」(p.118)い、強い態度で接しなかったと話す。

長谷川は、彼女が既に欠席日数をオーバーしているわけでもないのに、中退を決断したことをもとに、「格別強い逡巡もなく高校を中退」(p.118)した事例と位置付ける。

この解釈にふたつの留意点をあげておく。ひとつ、彼女の見通し(「このままいけば〔出席日数が引用者〕足りなくなるのは目に見えていた」)を根拠付けているようにみえる彼女の慢性疾患を、長谷川は病院の看護師による「夜眠れない原因は彼女の慢性疾患とは無関係」との判断をもとに退けてしまう。看護師の判断には医学的根拠があるのだろうが、それによって彼女のあげる要因を退けるには(もちろん、逆に看護師の判断を彼女のあげる要因で退ける場合も)より丁寧な説明が必要なのではないだろうか。

ふたつ、高校中退の際に母親は娘に「やめないでがんばれ」といったが、ぐれられては困ると考えて強く言わなかったと話している。離別母子家庭では母親一人が子どもを叱ると同時にフォローする役割を担わざるをえない。母親と父親がそれらの役割を分担したり、3世代同居家庭においては祖父母もコミュニケーションの「緩衝剤」としての役割を担うこともできる。ただし事例のように離別母子家庭の場合は、少なくとも母親一人が複数の役割を担う困難さが存在する。この場合、母親に学校へのこだわりはあるものの娘とのコミュニケーションのあり方がそのように離別家庭固有のあり方であるがゆえに、高校を中退したという解釈はできないだろうか。そのような固有の文脈をふまえる必要があったのではないだろうか。

### 高校不進学少女の事例 (⑬)

調査時21歳の少女は、13歳の頃に両親が別居し、姉は独立したため父親と2人で暮らした。中学2年の頃から学校に行かなくなり、友人と家でおしゃべりしていたという。不進学の理由を「雪が降っていてめんどくさくてとかの理由で学校に行くのが嫌になった」(p.120)と話した。

長谷川はこの事例を上述の高校中退の少女の事例以上に学校へのこだわりが希薄な事例と位置付ける。彼女にとっての学校は「何ら特別な感情もかき立てられることのない、ただぼんやりとやり過ごしてしまうべき平凡な風景」として、長谷川は描いている。

この解釈についてもふたつの留意点をあげたい。ひとつ、提示されている彼女のデータから、なんらかの判断を行うことは難しく、むしろここに語られるであろうことが語られていないデータとして解釈すべきではないだろうか。学校へ行かなくなった理由はあるもの話せ

ない、もしくは整理できていないので、「降雪」を理由として挙げたとの解釈も考えられる。このような「動機の語彙」とも解釈しうる理由をもとに、彼女の「学校へのこだわりの希薄さ」について判断することは慎重になるべきであろう。

ふたつ、彼女は学校に行かずに家で友だちとおしゃべりしていたという。そこでのやりとりが学校の意味付けや競争秩序の無化に影響を与えていることも検討すべきではないか。きょうだいや仲間集団との関係性の文脈における、学校へのこだわりを記述することが有効であるように考える。

#### 高校不進学 of 少年の事例 (①)

調査当時18歳の少年は、12歳の時に両親が離婚し、その後母親と妹、弟との4人で暮らした。生活保護を受給していたが面接の1年ほど前に「打ち切り」となった。小学校の頃から不登校で、家では手当たりしだいに本を読んでいたという。中学卒業後はビル美装会社に就職した。

#### 高校中退 of 少年の事例 (④)

当時17歳の少年は、4人兄弟の長男で、父は彼が小学校の時に失踪し、母は精神疾患を患った。そのために彼は中学2年の時に里子として預けられた。高校は進学するものの仲間集団から切り離されてやめてしまった。面接時はとんかつ屋にアルバイトとして勤務していた。最初の1年間は皿洗いであったが、その後は「肉の質(色, 油加減, 男用か女用か等)」を見分けることのできる地位(おそらく調理担当)についた。仕事は長時間で肉体的にも厳しいものの、「生活に満足」していると話す。

長谷川は、現在を積極的に受けとめるこれら2人の男性たちも、「学校での競争を通じての地位獲得という論理が社会の支配的な秩序であるという現状」(p.140)と捉え、かつ積極的に拒否していないことをもとに、彼らが学校へのこだわりが希薄であると述べる。

ただこれらの事例は、学校へのこだわりの希薄さが学校からの離脱を促進させているというより、幼少期からの生活環境により、「働く」ことへの意識が高いようにも解釈できる。「口でいろいろいってるけど、裏は違う」先生より、大人として相談相手になってくれる「社長」を信頼する高校不進学 of 少年の事例、そしてとんかつ屋としてスキルアップし大人の遊びである競馬を始めた高校中退 of 少年の事例からは、働くこと(=お金を稼いで、大人になること)への強い気迫を感じられる。この事例を学校へのこだわりの希薄さと解釈するのは難しいだろう。

以上4つの事例をみてきた。高校中退 of 少女の事例からは、本人ではなく看護師の判断を採用する説明が不十分な点と、離別母子家庭固有のコミュニケーションの取り方を留意点としてあげた。高校不進学 of 少女の事例からは、不進学 of 理由の「動機の語彙」の可能性と、学校外の場所や人間とのやりとりの位置付けについて言及した。最後に、高校中退と不進学 of 少年たちの事例からは、学校へのこだわりの希薄さというより、働くことへの強い気迫がみられることを指摘した。したがって、これらの調査データから、学校「不適応」 of 若者たちが「学校へのこだわりの希薄」であると解釈することには留意が必要であるように筆者は考える。

### 3. 4 「レンズ」を通じた「定型像」から〈生活—文脈〉理解へ

ここまで調査データから設定した議論は検証可能なのか(3.2), また提示された調査データの解釈は妥当なのか(3.3)について, 検討してきた。最後に長谷川が調査対象者の学校へのこだわりが希薄であると解釈したことの要因として考えられるものとして, 以下の2点をあげる。そのうえで, 貧困調査の課題と可能性について述べる。

ひとつ, 「学校へのこだわり」といったワーディングの問題点である。ある事象を説明するには「こだわり」というややあいまいな言葉ではなんでもいえてしまう。そのこだわりがポジティブなものか, ネガティブなものかはもちろん, その中身を具体的に記述し続けることで, 再生産論を議論するための重要なデータになりえたように考える。

ふたつ, 学校へのこだわりを強弱の軸で測ることの問題点。それは「気分がマイナスの方に募ったので, そこ〔学校:引用者〕から離脱した」(p.109)との説明から読み取れる。穿った見方かもしれないが, ここからはその測定値がある基準を超えたから, 学校から離脱したという説明図式が想定されているように思える。長谷川が冒頭で提示する「生活困難層の子ども・青年はその学校「不適応」をどう体験しているのだろうか」(p.109)といった課題設定に従えば, その体験は強弱で測られるものとしてではなく, 一見すると非合理的で矛盾に満ちた体験を生活の文脈から「翻訳」する必要があったのではないだろうか。

最後に筆者が「レンズ」を通じた「定型像」から〈生活—文脈〉理解の必要性を痛感した調査の一場面について紹介する。調査当時, 30歳の中里(仮名, 以下同様)と31歳の譲司は, 沖縄における建築業の参与観察を通じて出会った男性である。彼らと私は同じ会社の同じ班で働いており, 彼らはそれまでに型枠解体, 土木, アスベスト除去などの建築業を転々としていた。この日は旧盆に行われるエイサー(沖縄の伝統芸能)をみるために集まり, あるコンビニ前で演舞がなされるのを泡盛片手に待っていた。

中里「だから昔〔中学に通っていた頃:引用者〕とかでも, でーじ(とても)まじめに生きてきた人間とかいるさあ。」

打越「はいはい。」

中里「俺なんかはこんなってやんちゃしてるさあ。夜は遊んだり, 酒飲んでタバコ吸ってみみ(みたいなこと)するの, あったー(あいつら)からしてみたら, 本当はうらやましいやんばあて(と思うわけ), 自由に生きてうらやましいなあって思ってるばあよ。だから昔ってなんかやんちゃ坊主がもてるばあて。」

打越「ですねえ。」

中里「確実やんばあて。でも今となっちゃーよ, 前から努力してるから, いい仕事ついて, 人生逆転さ。あんし大人になってからの人生の方がながさんばーでて(長いだろ)。」

譲司「うん。」

打越「そうですかねえ。」

中里「やんちゃしてる時までは10代までさ, このはたち以降からは。」

(コンビニの駐車場にて, 2012年8月31日)

中里と譲司による学校の意味付けについて話し合う興味深いやりとりである。ただここでは私の「そうですかねえ」という反応に焦点をあててみたい。正直に告白すると, 「人生逆転な

んでしていません」との否定的な意味合いを込めて、私はこのように反応した。より具体的には、『ハマータウンの野郎ども』をイメージしながら、中里の話を読み、学校文化(特に競争秩序やその際に強く抱かれる現在より未来を重視する「未来志向」)に対抗的な語りが出てくることを想定しながら聞いていた。しかし、彼の話とそれを聞いていた譲司の反応は、競争秩序を前提とし、自分たちはその「脱落者」であり、そして自らの厳しい現況は自業自得と言わんばかりのやりとりであった。補足すると、彼らは地元の先輩・後輩たちを基軸とした厳格な年齢規範と男としての「強靱さ」を重視する文化に生きている(打越 2011)。私はそれを建築現場で直接にみてきたこともあり、上の彼らのやりとりは「軟弱」にうつり想定外であった。ゆえにこのように反応した。

ここに私が身につけていた「レンズ」とそれによって写し出された「定型像」、そしてそれとのズレを確認できる。つまり、苛酷で不安定な仕事に就く彼らは、学校文化に対抗的であるといった「レンズ」を通じた「定型像」である。しかし、実際にはその「定型像」からズレたものが私にはみえた。このズレをどのように扱えばいいのだろうか。またこのズレは調査時間を増やし、調査対象者やその社会を拡げることで埋まるのだろうか。本稿の執筆者による見解は、ノーである。ズレを埋める作業は、調査の期間や調査対象の拡大ではなく、生活の文脈にそって、反省的な態度で構築し続けることしかないだろう(宮内 2008)。少なくとも学校へのこだわりを掴むためには、中学時の出来事を30歳になって振り返るといった時間の幅を行き来することや、それにとまなう社会的立場の変化の過程をふまえた「レンズ」の更新作業が必要である。現実をみるには「レンズ」は欠かせない。だからこそより適切な「レンズ」を選択するために、生活の文脈への着目は可能性をもっているだろう。

本節は、ここまで長谷川論文を提示されたデータに基づき再検証してきた。このような作業が可能となったのは、久富らの共同研究が検証可能な形でデータを開示してくれたためである。今後は、本節の再検証も含めて、開示された調査データが〈生活－文脈〉にもとづいた理解によって深化されることを望んでいる。(打越)

#### 4. 「ヴェール論」にかかる「ヴェール」——『豊かさの底辺に生きる』における学校・教師論の陥穽

##### 4. 1 学校・教師と生活困難層の間の「ヴェール」

3節で検討された長谷川論文では、生活困難層の青年の学校「不適應」が対象とされていた。これに対し、生活困難層の子どもたちが学校でどのように受け止められているかを検討したのが、『豊かさの底辺に生きる』第4章の久富善之「学校から見えるヴェール—重——教師・学校にとっての生活困難層」である。ここでは、教師や学校が生活困難層の実態を捉え損なっている状況が、「ヴェール」というメタファーによって語られている。

久富論文で最初に取り上げられるのは、ある小学校教師の事例である。この小学校教師は、「今までの学校とはまったく異質」、「片親家庭はクラスに4～5件、最近は小学校入学後の離婚も多い」、「教師がみな、5・6年生を持ちたがらない。先生が真面目にやるほど子どもが離れて、ほとんど学級として成り立たない」など、このA団地の学校の「困難さ」を訴える。しか

し、そこには母子家庭の生活の苦勞についての言及がなく、ただ学校からみた子どもと親の姿しか語られていない。学校と生活困難層の間には「ヴェール」があり、学校側では生活困難層についての定型像が構築される。そのため、ヴェールの一重むこうにある生活困難、不幸の重なり、そのなかでの頑張り、「この子だけは」という強い願いは見えていない、とされる。

また、学校管理層へのインタビューからは、次の3点が示唆される。第1に、「低所得層といった特別な見方は、教育の場にふさわしくない」という認識である。この認識によって、生活困難層の子どもたちの生活の困難や「くずれ」が「ないもの」とされ、「平等にあつまっている」という自負が形成される。そのことが、ヴェールの形成と温存に寄与しているという。

第2に、「すばらしい学校」型言説の存在である。これは、「全市一」や「すばらしい自然と経験につつまれて、子どもたちが落ち着いた本当にいい学校」など、自校がいかにもすばらしいかを表現する言説である。これは、問題の存在をごまかすのではなく、学校の成員に自校がすばらしいと捉えさせることで生じる権威によって教育を効果的に進めようとする「知恵」である。ただし、この「すばらしい学校」型言説の裏で、生活困難層の子どもの問題にはスポットがあたらないことになる指摘する。

第3に、「ステレオタイプ型言説」の存在である。久富らが調査を行った地域には、子どもの貧困の実態を把握するなど、ヴェールを取り去っているかに見える学校もあった。しかし、これらの学校でも、子どもが不適応を生じる原因は、生徒の無気力や成育歴、あるいは子どもをコントロールできない親に求められる。一方、学校側の取り組みの不十分さゆえに子どもの不適応を克服できないという発想は見られない。したがって、「よき教師」なのに、「欠陥生徒」「欠陥家族」であるがゆえにうまくいかないというステレオタイプがつけられる。このようなステレオタイプが、生活困難層の実態を見えにくくするヴェールの形成に一役買っているとされる。

さらに終章では、このステレオタイプの「ペダゴギック」(教育的)な含意が検討される。学校で重視される規律には、静肅、時間厳守、従順、集中、達成意欲などがある。これらは、「本来家庭でしつけるべき」だと教師は考えている。しかし、生活困難層は、それを身につけることができない「欠陥家族」「欠陥生徒」であるがゆえに、しつけを肩代わりしようという意識を持つ。この点で、教師たちは「善意」で規律を身につけさせようとしているという。

しかし、生活困難層の子どもたちは、これらの規律に則ることができず、「つまずき」を生じることも少なくない。その結果、つまずいた子どもたちは、さらに「欠陥生徒」の色彩を濃くしてしまい、学校への不適応や低い学業達成を経て、再び低階層へと入っていく。つまり、教師が「ペダゴギック」な観点で行う指導が、かえって生活困難層の「つまずき」を誘発し、生活困難層へと入っていく「再生産」を生じることとなる。そして、この問題を回避するためには、生活困難層につまずきを生じさせないようにペダゴギックな仕事の内実を組み替えることが必要だとされる。

#### 4. 2 「ヴェール」の「取り去り方」

このような分析を行った久富は、A団地を校区とする学校の教師たちの状況に、ある種の「憤り」を覚えていることが読み取れる。本書とは別の論考だが、同じ対象の分析で次のように述べている。

この層(A団地の生活困難層:引用者)の人々がその人生遍歴のなかでどのような不幸をきざんで今日にいたったか、そしていま、現実に彼らの上に現代社会の酷薄なメカニズムがどう作用しているかについて、本当にことがらに即して(中略)正視する機会があったならば、またそうした困難をその成長と生活に刻み込んだ子供たちの苦闘に共感することがあったならば、あのような定型像でことを片づけられるはずがない。(久富1993:127-8)

この「憤り」の裏側には、現に「本当にことがらに即して正視する機会」を実現した学校や教師の実践が想定されていると考えられる。

久富は、このころ発表した別の論文(久富 1994b)で、東京都の足立一中の実践を分析している。この足立一中の実践は、林友三郎による一連の実践記録でよく知られている。足立一中の校区は、「やくざや愚連隊がその末端で中学生にまでつながっているところであり、商業主義的頹廢文化が街にあふれる場所であり、生徒の親たちのなかに貧困と家族破壊が進行している場」(久富 1994b:218-9)であった。それゆえ、生徒たちの「非行」がいたるところで見られた。その状況に対し、「『非行』という形でその逸脱行動を示している生徒たちひとりひとりについて、教師たちはどの子も見放さないでなんとか立ち直らせよう」(久富 1994b:214)とし、生徒に立ち向かい、そして教師同士の議論を重ねる。この議論は、「ひとりひとりにとっては裸かの神経を擦られるような痛みを伴おうとも、あえて、おたがいの磨き合いがなされなければなるまい」(林 1979:113)との思いから何度となく積み重ねられ、その結果、以下のような省察も導かれている。

教師という人種には、弁解の余地もないほど追いつめられるという経験が少ないから、口では民主主義を唱え、平等を叫んでも、一段高い教壇の上からお説教を授ける先生根性が抜きがたく残っているのだ。子どもと話し合うなどといっても、人間対人間の関係でも、結論が先に決まっていて、「わたしのほうは絶対まちがっていない。」という条件つきである。このような、権力をかさにした説得などでは、相手を屈服させることはできても、信服させることはできまい。(林 1979:111)

ここでの教師自身の権力についての反省は、A団地の学校の教師たちが、「善意」によりながらも、生活困難層の子どもたちに対する従来からのペダゴギックな関わり方を改めようとはしないことと対照的である。足立一中の教師たちのようなりフレキシヴな議論と実践の積み重ねが、「ヴェールを取り去る」ことにつながると受け止められる。

#### 4. 3 久富らの前にかかる「ヴェール」

ただし、足立一中の教育実践は称賛に値するものだとしても、その見地からA団地の学校や教師のあり方を捉えることにはいくつかの違和感も覚える。その第1は、生活困難層の子どもへの新たな関わりを可能にする要因として、教師の運動がやや過大に評価されていることである。足立一中の実践を成り立たせた基盤について久富は、教師たちが「職場における教師たちの自由を確保するために、ちょうどこの時期に『勤評反対』闘争を激しくたたかっていた。また『特設道徳』の強制に対しても、これを『ホームルームの時間とする』ことを職場で確認して、その形骸化を図っている。国家権力との関係において、教師たちの職場での自由の雰囲気

の確保に、それだけの運動的な力が必要になってい)(久富 1994b:220)たことを指摘する。

また、A団地の学校でも、「ヴェール」に覆われていない認識を持つ何人かの教師が紹介されている。ただし、そこでは「民間の研究会に自主的に参加するようなネットワークを形成している実践家教師たちは、当然ながら学校管理層とは異なることからの捉え方をしている」(p.175)と述べられている。この点は、教師文化は多様だが、学校によってその特徴は比較的明瞭にわかれている(久富 1994a:18-9)ことをふまえ、それぞれの学校で支配的な生徒観・保護者観を相対化するためには、勤務校以外のネットワークを持っていることが必要だと指摘しているだけかもしれない。だが、「民間の研究会に自主的に参加する」という姿勢は、ある種の教育運動に携わっていることでもある。教育運動への参加経験が、問題意識の深まりや生徒との新たな関係の結びつきを実現するエネルギーになることは否定しない。また、教育運動そのものについて、私個人も共感する部分は大きい。しかし、仮に「ヴェールを取り去る」ということが教師にとって取り組むべき課題だとした場合、その解決ルートが教育運動とだけしか描かれないのはやや不十分である。さらに、A団地の学校の教師たちが、「教育運動に参加しているからうまく対応できている」「教育運動を持たないゆえに問題を孕む」と、子どもの貧困への向き合い方よりも、教育運動の有無によって評価されかねない危険性もある。

加えて第2に、「A団地の学校の教師たちにはヴェールがかかって生活困難層の実態は見えないが、久富ら研究者には生活困難層の実態が見える」と述べているように感ぜられるところも違和感がある。本稿の他の節でも十分に展開されているように、久富らの生活困難層把握にも不十分な点があり、その点では久富らの前にも「ヴェール」がかかっているといい得る。さらに、久富が描いた教師たちの生活困難層のステレオタイプ化は重要な知見だが、それが本当に教師たちの捉え方のすべてを押さえたものであるかについても疑問がある。「平等にあついている」という表現のなかには、久富が紹介しているような「地域が悪いから子どもたちが悪いと思いたくない」(p.173)という教師の思いも含まれているかもしれない。

#### 4. 4 学校や教師に寄り添う研究

そのように考えた場合、久富らの研究より2年早く発表された志水宏吉らの研究(志水・徳田編 1991)が注目される。志水らは、兵庫県尼崎市の「南中」を対象に、この学校での教育実践を分析している。「南中」の校区は、ブルーカラー層が多いことに加え、同和地区の住民や在日韓国・朝鮮人の住民も多い。また、1970～80年代は相当な荒れを経験しており、生徒の学力は他校と比べても最低水準にあった。そのようななか、「学力向上」を目指して全校を挙げた取り組みを進め、一定の成果が出ている。今日盛んに使われる言葉でいえば、「効果のある学校」「力のある学校」ということになるだろう。

この学校の成果の背景には、志水が「逆トーナメント型指導」(志水 1991b:169-71)と分析した指導がある。「逆トーナメント型指導」とは、一定の学力があり、放っておいても受験を突破できる生徒は勝ち抜けのような形で指導の対象からはとりあえず外し、学力が足りず、放っておけない生徒をトーナメント式に残していった、もっとも放っておけない生徒への指導を手厚く行うというものである。

そして、このような指導は、校長のリーダーシップによって実現された。この校長は、「わたしは国粹主義者。組合はきらいや。あの人たちは現実にできないことを言うのが得意や。生徒たちには一生懸命勉強させにゃあアカン。植民地にされてしもたらかなわんからな」(志水

1991a:8)と平気でいうような人物である。久富が紹介した足立一中の教師たちとは、少なくともイデオロギー的には正反対である。ただ、それでも、学力向上を通じて、子どもにもたらした成果は少なくない。ここには、政策に批判的なイデオロギーに基づいた教育運動に立脚する以外の問題の解決ルートも見出される。このことから、イデオロギー的な立場を一旦括弧に括ったうえで、実践を分析する地平が必要だといえよう。

このようにイデオロギー的な立場を括弧に括った分析を可能にしたのは、志水らの研究方法のふたつの特徴が関わっている。ひとつは、志水らの取り入れたエスノグラフィーの方法が、1節で指摘された〈問題者発見レンズ〉の作動を抑える効果を果たしたことである。今でこそ、教育社会学やそのほかの社会学でも、エスノグラフィーを用いた研究の蓄積はかなりのものになる。しかし、1990年代前半には、まだそれほどポピュラーな方法ではなかった。しかし、このエスノグラフィーの方法を取り入れることで、ワンショットではなく一定の時間的な幅を持ち、教師たちの直接的な言葉だけではなく実際の行動も含めた分析が可能となった。このことは、エスノグラフィーによる研究が〈問題者発見レンズ〉を捉え返す機会を提供し、そのレンズによる安易な解釈を防いだものと受け止められる。これによって、実践の中身をより精緻に捉えることができたと考えられよう。

また今ひとつは、教師との共同研究として行われたことである。志水とともに編者を務めた徳田耕造をはじめ、この研究書には3人の「南中」の教師が原稿を寄せている。さらに、原稿の作成にあたっては、互いの原稿について、相当な時間をかけて討議し合ったとのことである。これによって、研究者と現場の教師との認識は、まったく同じものにならずとも、かなり高いレベルで互いに理解可能なものとなったと考えられる。

現場とのやりとりでいえば、久富らも調査対象者らに報告会を行い、そこでの反応を研究に取り入れている部分もある。しかし、それは不十分であったのかもしれない。それは、久富自身が「調査の準備・進行・中間報告等の各段階で、地域住民団体との協力関係は、ことがらの認識を交換し、共有し、また深めるという良好な面があったが、学校・教師との協力関係をそういう形で進めることが必ずしもできなかった。この地域の学校関係者には、外から調査団が入ってきて、あれこれ調べて、学校を批判して行った、というような印象を与えてしまった面もあると思う」(pp. 229-30)と述べていることにもうかがえる。なぜそうなってしまったのかを考えれば、久富らのヴェール論には、「本当に教師たちの文脈に即して正視する機会があったならば、またそうした困難を教師たちの苦闘に共感することがあったならば、あのような定型像でことを片づけられるはずがない」との感覚がつかまとうからであろう。「ヴェールにとらわれている教師」という像自体が、久富らがつくりあげた「定型像」のようにも思われてしまう。

教師たちが、生活困難層を定型像で捉えていること、そして「善意」のペダゴギックな関わりがさらに生活困難層の子どもたちを苦しい立場に置いていることは、きわめて重要な知見である。このような分析的な知見は、現状報告を重視した志水らの研究には、それほど明瞭には示されていない。しかし、久富らの知見をもって、さらに具体的な教育実践に反映させていく場合、現場とのより緊密な関わりが求められる。ほぼ同時期に、同じような困難を抱えた学校を対象としてまとめられたふたつの研究を比較すると、久富らの研究の延長上に、研究者自身がいかなるイデオロギーや価値観に立脚しているかをリフレクシヴに捉えながら学校や教師に寄り添う取り組みが求められる。それは、〈問題者発見レンズ〉をかけていることを自覚する

ことだとも言い換えられる。そのことの重要性を確認するために、最後に久富自身の指摘を掲げておきたい。

教育現場における何らかの問題・困難を聞き出そうとするとき、「仕事がとにかく忙しい」、「最近の子どもがひどい」、「最近の父母がひどい」という以外の問題が出てこない。そしてそれ以外の、たとえば同僚関係の問題点にまで話をあえて及ぼそうとするとき、聞き手の側じしんが価値的に迫ろうとしていることに気づいて「ハッ」としたことがあった。教員世界を見えにくくしているヴェールは、彼らの外側から何らかの価値軸を押しつける、そのような教員たちとの交渉関係の特質の中に発生しているヴェールである。(久富 [1988]1990:iii) (新藤)

## 5. 貧困を増幅させる地域のコミュニケーションをめぐる

### 5.1 公営住宅と貧困

貧困層が特定の地域に集積することは、その地域における貧困層を孤立させ、貧困を増幅させる。近年、このような形で貧困層の集住がもたらす効果、特に地域のコミュニケーションが貧困を増幅させる効果に焦点をあてた実証研究が目立つようになっている(宮内・松宮・新藤・石岡・打越 2014)。

こうした視点からの先駆的な研究こそ、小澤浩明による第5章「地域社会での〈階層化秩序〉と生活困難層」(以下、小澤論文と表記)である。1980年代後半から1990年代前半にかけて、ちょうどバブル景気とその崩壊、長期不況へと至る流れの中で、「豊かさの底辺」の舞台として公営住宅を取り上げ、そこでコミュニケーションをめぐる問題をあぶり出した小澤論文は、それまで忘れられがちであった貧困と地域の問題を突きつけるものだった。ここでは他の章と問題意識を共有しつつも、独自の理論枠組みとデータ解釈を志向していると思われる小澤論文に焦点をしばり、貧困を増幅させる地域のコミュニケーションのとらえ方について検討してみたい。

ここでまず注意しておかなくてはならないのが、舞台となった公営住宅である。近年の研究では、貧困層が集積する地域の中でも、公営住宅に注目が集まっており、調査研究が積み重ねられてきている。この久富グループが焦点化した「生活困難層」とは、母子(父子)家庭、傷病・障害者家族、引揚者家族という、家族が抱える「弱点」が可視的であり、さらに、市営住宅に居住する層という独自のとらえ方がされているが、「市営住宅居住」という要素が重視されていることを確認しておこう。

そもそも1951年に制定された「公営住宅法」は「住宅に困窮する低所得者」を対象としたものであるが、法制定時は「潜在的な中間層」の入居も想定されており、収入分位で下から80%のカバー率となっていた。しかし、入居の際の収入基準が段階的に引き下げられ、現在ではカバー率が25%になっている。それにともない、高額所得者の厳罰化、民間並み家賃の適用によって、中間層の入居は法制度上不可能となり、低所得者の集住が進むようになった。こうした動きと連動する形で、高齢者、障害者、母子世帯など福祉的カテゴリーについては入居基準がゆ

るめられ、それらの「受け皿」としての性格が強められていったのである。

その結果、2008年に実施された総務省「平成20年度住宅・土地統計調査」では、公営住宅居住者（「公営の借家」）の世帯の年間収入階級の割合を見ると、100万円未満が16.9%、100～200万円が29.8%と半数弱を占め、22.2%の200～300万円の世帯までをに入れると、合わせて7割弱を占めるようになっている（樋田 2013）。こうして公営住宅では、年収300万未満世帯、母子世帯の比率が上がり、転出率の低下によって住民層の固定化が進んでいることが明らかにされている（平山 2011:226-7）。

このような公営住宅という点から見た場合、本調査の舞台となったA団地は調査当時どのような状況だったのだろうか。A団地は約8,000世帯、人口約26,000人で、1966年から建設された大規模団地である。調査時のA団地では、個人住宅（全住宅の27%、所得基準4人家族で年収600万円程度）、市営住宅一種（同約43%、300万円後半から400万円）、市営住宅二種（同約30%、300万円前半）の三層構造で、入居条件がより厳しい、母子世帯、高齢者世帯、傷病・障害者家族、中国引揚者世帯が優先的に入居している第二種住宅が相対的に集中していることにより、全体として低所得者や不安定就労者層が多くなっていった。小澤論文で明確な記述はなされていないが、調査時点での第一種住宅の収入分位カバー率が33%、第二種住宅の収入分位カバー率は約18%となっており、その差は大きかったのである。

## 5. 2 生活困難層が「孤立・敵対」に追い込まれるプロセス

小澤論文では、このように新たに作られたA団地の住環境における住民のコミュニケーションに注目し、住宅ごとに階層が区切られることの帰結として、生活困難層が「孤立・敵対」に追い込まれていくプロセスが描き出されていく。

まず最初に確認されるのが、市営住宅では、入居当時は活発なコミュニケーションがあり、自治会をはじめとした比較的活発な地域活動が展開されていたという点である。しかし、自治会の出席率低下、役員選出の困難、「助け合い」という相互扶助の衰退により、80年代に入り住民間のコミュニケーションレベルが著しく低下した。それに対応する形で、団地の生活内部でも変化が起き、生活様式のレベルが同水準であっても、わずかな差異を異常なまでに意識し、その差を競う〈果てしなき差異化〉現象が生じたとする。特に、相対的に弱いレベルにある母子（父子）家庭、傷病・障害者家族に対して攻撃的に〈うわさ〉が集中した。

この〈うわさ〉の攻撃的集中には次の3つの特徴があるという。①〈果てしなき差異化〉現象の中で、ちょっとした生活様式の違いを過剰に意識させる。②相対的に弱い層、垂直的下方に差異化力が攻撃的に集中して〈うわさ〉による「抑圧の委譲」が生じる。③母子家庭、傷病・障害者家族など可視的な特徴を指標に境界線が引かれ、〈うわさ〉による住民の分類＝等級づけと、関係の序列化により、可視的な「弱者層」を抑圧する《階層化力》が機能する。こうして市営住宅が、「生活困難層」の「孤立・敵対」を生み出す《階層化力》がつかぬいた〈場〉となることを明らかにしている。

続いて、個人住宅と市営住宅の住民の関係に関する分析が行われる。個人住宅では、住宅区内の人間関係において〈うわさの階層構造〉は認められず、適度な「距離」をもってつきあう傾向が確認された。しかし、そのような個人住宅の住民も、相対的に生活困難層が多く居住する団地住民に対しては、ステレオタイプ化された地域像を持つ。生活保護世帯・離婚世帯が多く、「生活の崩れ」が蔓延した地域とするものである。そして、個人住宅の住民は、このステレ

オタイプ化された地域像にあたるのは市営住宅の人びとだけであると強調し、自分たちとの間に境界線を引く。住民たちは自分たちのアイデンティティをなんとか守ろうとする結果、「おれたちはあいつらと同じではない」という意識から、市営住宅の人びとをある〈ステレオタイプ〉に押し込めていると分析されている。

ここでもう一度舞台となった団地の構成を確認しておこう。そもそもA団地では、個人住宅／市営住宅一種・市営住宅二種という強い空間的区分があった。小澤論文では、さらに個人住宅・市営住宅一種／市営住宅二種という意識層の境界を地域住民のインタビュー調査から明らかにし、第二種住宅が二重に区分されたことを示したのである。こうして、「客観的な基盤の差異に重なるかたちで、〈表象レベル〉でのふたつの《階層化力》が存在」し、「生活困難層」が「孤立・敵対」に追い込まれたプロセスが見えてくる。つまり、〈表象レベル〉での〈階層化秩序〉によって引かれる境界線が、住宅区分や収入などの客観的な区分にほぼ対応することとなり、客観的な区分が様々な相互行為のなかで住民の身体の内々に刻み込まれながら〈主観的な境界感覚〉へと変容していくのだ。そして、このような《身体化された境界感覚》が、日常生活の様々な場面に貫かれることになる。

### 5. 3 地域のコミュニケーションから見ることの意義

以上の分析から、A団地は全国的に進んでいた「公営住宅のスラム化」の事例ととらえられる。「スラム化」とは、住民相互のコミュニケーションレベルの低下を背景としてある種の伝統的な「共同性」が解体し、「生活困難層」が周囲の住民から「孤立」し、地域の人びとに対して「敵対」してしまうことである。こうした「公営住宅のスラム化」のプロセスを明らかにした小澤論文は、近年の公営住宅を対象とした研究を含め、以降の地域と貧困をテーマとした多くの研究に引用されてきた。

この小澤論文のオリジナリティは、コミュニケーションレベルへの注目にあったとみることができる。住宅の貧困化を指摘する研究のほとんどが、貧困層の地域からの孤立を主として質問紙を用いた意識調査データの分析をもとにとらえるものが多く、どのようなメカニズムで孤立していくのか、地域内部のコミュニケーションに関する分析が乏しかったからである。

このように、公営住宅における相互作用レベルの分析から、生活困難層の地域、コミュニティにおける生活実態を描き出し、貧困が孤立を生み出すメカニズムを明らかにした点で重要な意義を持つ。ここで重要なのは、実際の収入区分以上に、〈うわさ〉を通してステレオタイプ化された認識が孤立と敵対状況を生み出し、それが、さらに状況を悪化させていくというスパイラルを析出した点である。つまり、団地内、および団地への〈うわさ〉によるスティグマ化をもたらしコミュニケーションが、そこに暮らす貧困層の状況をさらに悪化させてしまうという地域のコミュニケーションが持つ独自の効果を明らかにしたのである。住民の世帯収入による客観的な指標による区分だけでなく、地域住民の〈うわさ〉というコミュニケーションによる境界線の強化によって、生活困難層の住民が客観的指標を可視化され、排除されていく。ここには、単に貧しい人びとが集中して居住していること以上の、低所得で暮らすことの惨めさが増幅される問題、そして貧困地域のスティグマ化が居住者の生活を全分野にわたって悪化させる問題が明確に示されている。貧困は、それが集積する地域の社会関係、他の地域との関係という地域的要因によって生み出され、また、増幅される。そのプロセスをコミュニケーションレベルの詳細な分析をもとに明らかにした点で、公開から20年以上経過した現在においても、

依然として注目される研究成果となっていると考えられる。

もっとも、こうした意義を認めた上で、いくつか検討すべき点があるように思われる。具体的には、インタビュー調査をもとにした〈うわさ〉という表象レベルの分析が、既存の属性レベル、質問紙調査で明らかにできるレベルを超えているか。そして、その潜在的な可能性を十分展開し切れているのかという点である。以下で2点ほど問題を指摘したい。

#### 5. 4 「共同性」のとりえ方

第1に、小澤論文における公営住宅での「共同性」のとりえ方の問題について考えてみたい。近年の公営住宅に関する研究では、「高齢」「障害」「母子」という「福祉カテゴリー」の居住が増加し、「固定した低所得層」の集住によって、高齢者が多く自治会の運営が困難となり、孤立した場所を形成し、入居者が社会のメインストリームから切り離されてしまうことが懸念されている(平山 2011:229)。

こうした傾向は、小澤論文においても確認されている。自治会の出席率低下、役員選出の困難といった地域の相互扶助の低下があり、この「共同性」の弱体化によるコミュニケーションレベルの低下を基盤として、生活困難層を追い詰める〈うわさ〉が生じると考えられている。ここで強調されるのは、ある種の伝統的な「共同性」(p.179)の存在と、その消滅のプロセスである。

では、このような「共同性」はどのように消滅したのだろうか。小澤は、「共同性」が消滅した要因として、次の3点を指摘する。①持ち家政策によって公営住宅の価値づけが相対的に低下し、母子家庭、老人世帯などの優先的入居層の集中、全体的な定着率の低下によって「共同性」の契機を失わせた住宅政策の問題、②わずかな差異を意識させ、好奇心を生む団地特有の地域空間的要因、③企業の「権威主義的支配」による家族の包摂により、適合しない家族を「問題家族」として阻害するという社会構造要因である。

ここで重要なのは①の要因である。②と③の要因は第二種住宅以外の団地全体にもあてはまるからだ。当時の第二種住宅では、相対的に貧困に結び付きやすい経済的基盤、家族的要因を抱えた層が集住することによって、自治会活動を中心とした相互扶助が停滞していたのは、おそらく指摘の通りである。しかしながら、公営住宅をめぐる研究では、自治的基盤の薄さではなく、自治機能の強さが指摘されていたことに注意したい(竹中 1990)。公団住宅(現UR)の場合は住宅内の管理を外部委託するのに対して、公営住宅では自治会加入が必須条件になっていることなどいくつか理由があるが、小澤論文ではこの公営住宅の自治会活動の機能についてはほとんど触れられていない。これは小澤論文でも言及されている、竹中英紀(1990)による生活様式に着目した「住宅階層」研究と大きく異なっている。

ここで、A団地調査時と、ほぼ同時期に実施された「住宅階層」をめぐる調査研究を見ていこう。住宅の所有関係と集合居住とによって相互に区分された世帯の集合である「住宅階層」の調査研究では、公団賃貸・分譲の相対的に階層の高い住民よりも、相対的に階層の低い都営住宅居住者の方が住民の共同志向が強く、自治会を通じた問題処理をする傾向があることが明らかにされている。その上で、住宅政策が「地域住民の社会経済的構成における差異を空間的な居住分化(セグレーション)」を生み、地域社会における階層間の葛藤・紛争を引き起こしているとする。居住分化という不平等の空間化が「相対的に独自な生活様式を発達させる」ことによって社会階層を実体化させ、「階層間対立の先鋭化」を起こすという知見(竹中 1990)は、

小澤論文でのA団地をめぐる分析と重なり合う。

この生活様式に注目した「住宅階層」研究に対して、小澤論文の分析は、内的な意識、〈表象レベル〉を重視する。住民の〈うわさ〉の分析を通して、住民相互のコミュニケーションレベルの低下を背景としてある種の伝統的な「共同性」が解体し、周囲の住民による〈ステレオタイプ〉的認識が「生活困難層」を「孤立・敵対」に追い込んでいるととらえ、地域社会に貫いている「孤立・敵対」を強いるプロセスを詳細に明らかにしたのである。たしかに、これはネットワーク、住民組織レベルだけでなく、そのコミュニケーションレベルに焦点を当てた小澤論文のオリジナリティである。しかし、竹中が行ったように団地での住民の生活様式、パーソナル・ネットワーク、生活構造を加味した分析を行うことも必要だったのではないだろうか。

このように考えるのにはふたつの理由がある。第1に、小澤論文が着目する〈うわさ〉という表象レベルの分析は、あくまでも調査対象者となった住民の語りによるものである。小澤論文の主張が実態レベルで機能していることを検証するためには、これらが住民の団地内外でのコミュニケーション、行動とどのようにかかわっているのか、意識レベルと行動レベルの一致は認められるかという点に関する分析が不可欠である。小澤論文では語りからとらえられた表象レベルと、コミュニケーションなど行動レベルが一致していることを前提にしていると思われるが、〈表象レベル〉での〈階層化秩序〉によって引かれる境界線が、住宅区分や収入などの客観的な区分にほぼ対応することは、自治会での活動といった住民のコミュニケーション、行動レベルの分析からしか見えてこないはずである。これは、本稿第2節で検討された調査方法論としての問題だけでなく、その「共同性」をどのようにとらえるかという解釈の面で重要であり、2点目の理由とかわる。

第2に、小澤論文の「共同性」の位置づけの問題がある。小澤論文で明らかにされた「生活困難層」の排除は、団地における伝統的な「共同性」の解体をベースに生じるものであり、この解決策としては、その復権とは言わないまでも、何らかの「共同性」への期待がなされている。しかし、〈うわさ〉という表象レベルが住民間のコミュニケーションにおいて機能するのは、そこに何らかの「共同性」があるためである。〈表象〉レベルの排除の動きが、相対的に強い自治会等のネットワークレベルの「共同性」をベースとしているのだとしたら、こうした「共同性」の強さこそ、〈うわさ〉による〈階層化秩序〉を生起させるのではないだろうか。そして、この点が事実であるとすれば、そこからの「解放」の道筋の描き方も変わってくるはずである。

## 5. 5 「解放」の道筋は妥当か

2点目として、小澤論文での地域の「スラム化」状況からの脱却、「孤立・敵対」を強いる〈メカニズム〉からの「解放」の展望について考えてみたい。コミュニケーションレベルが低下する以前には、こうした〈境界感覚〉は弱かったという前提のもと、「逆に考えれば、〈主観的な境界感覚〉は住民同士の相互行為の性格を転換していくなかで、しだいに変容し、弱くなっていく性格をもつものと考えられるのではないだろうか」とする。そして「地域のコミュニケーションの活発化をなんらかの形で実現すること」(p.211)に期待を寄せるのだ。

たしかに、地域と貧困をめぐる問題の解決策として提起される議論の多くは、小澤が示したような、特定のカテゴリーを排除することなく、階層横断的に地域のコミュニケーションレベルを上げるべきとする主張が多い。つまり、特定の層を排除しない、多様な階層のコミュニケーションの場を作ることを目指すというものだ。たとえば、「バリアーをともなったままの

混住化は、「差別や敵対を生みやすい」ことに対して「ソーシャル・ミックス」を期待すること(橋本 2011)や、多様な階層の話し合いの場というコミュニケーションへの期待(竹中 1990)は、こうした傾向を強く持っている。

しかし、「共同性」に単純に期待して良いのかという問題を考える必要はある。「共同性」の質が低下したから上げれば良いというように、単純に問題ある状況を反転させるかのような「解放」の道筋に危うさはないだろうか。そして、それはそもそも実現可能な道筋なのだろうか。前節で見たように、「共同性」がないからではなく、あるからこそ、〈うわさ〉を通じた排除が見られたのではなかっただろうか。

小澤論文で分析されている〈うわさ〉も「共同性」、「地域のコミュニケーション」のひとつであり、その転換がどのようになされるのかが不明確であることは否定できない。この「共同性」という問題をめぐって見落とすべきではないのは、小澤論文の中で漏れ聞こえてくる切実な声の数々である。

いくつか具体的に見ていこう。団地での〈階層化秩序〉とは異なる〈秩序〉を提供する宗教への期待、「つきあっていない」、「あまり深入りしないほうがいいのではないか」という生活戦略(p.187)、個人住宅に見られる「距離をとる」という作法などは、団地を貫く〈うわさ〉を中心とするコミュニケーションに対抗する意味も含めて検討するべきものと思われる。また、「共同性」の強調は、「この団地でも、老人、母子、父子世帯が増えている。協同作業に非協力的な人が多いのが、この団地のガンだと思う」(p.188)という語りで見られるように、母子世帯、高齢者世帯など、「共同性」を基準にした新たな排除のカテゴリーを生み出す危険性がある。「共同性」への期待が、さらなる排除につながる可能性は無視できないのだ。

こうした「共同性」の負の側面も見据えつつ、貧困層が集積する地域の多様なコミュニケーションのあり方を探ることにより、小澤論文で示された方向性をさらに推し進めることができるのではないだろうか。ここで考えられているのは、「共同性」に限定されない解決策である。実は、久富善之らによる終章で論じられているのだが、この点については次節にゆずり、ここでは、その方向性を考えておくことにしたい。これは、「解放」の道筋をコミュニティのコミュニケーションレベルに限定しない視点であり、近年の貧困や社会的排除をめぐる議論でも重視されているものだ。たとえば社会的排除をめぐることは、コミュニティに期待する議論が多くなっている(樋口 2004)が、この点に対して、Byrne (1990=2010:240)は、「コミュニティ」を近隣関係に狭めてしまうことに警鐘をならす。そして、共通の空間的経験に裏打ちされた共同性を意識し、共同的に行動する関係に拡張することを求めるのだ。これは近年のコミュニティ論においても重視されている視点である。その意味で、地縁関係に限定されないネットワークの可能性が重要だろう。「近隣」でありつつも、地縁以外の多様なネットワーク、居住地に根ざしつつも、個人が選択することが可能なネットワークの構築(松宮 2012)はその方向性のひとつである。

これは、小澤論文の持つ限界を乗り越え、その潜在的可能性を最大限開くためにも不可欠の視点であると思われる。そして、貧困と地域をめぐって提示される「共同性」という解決策の持つ、どこか閉塞感を感じさせる解消策のオルタナティブを描き出す一歩となるのではないだろうか。(松宮)

## 6. 定型像を超える貧困の実証研究に向けて

### 6.1 定型像は揺さぶられたか

久富善之らによる終章「生活困難と学校システム」では、各章での議論の整理とともに、当該書全体を貫く久富グループの共同研究のねらいが語られている。ここで強調されているのは、リアルな「ことなりゆき」をとらえることを通して、貧困をめぐる定型像を揺さぶることが研究の中心的な目的であるという点だ (p.218)。

では、ここでいう定型像とは何か。久富は、①逆境や困難という「悪条件がかえって好条件」になるという、ある種の「人間ドラマ」として期待される定型像、②逆境、困難が重なっていく「貧困の再生産」や「剥奪の循環」という定型像のふたつを示している。このふたつの定型像は対照的なストーリーであるが、久富グループの調査は、どちらの定型像とも異なる、錯綜した「ことなりゆき」「ことがらの関連」からとらえようとしたという。ここには、これらふたつの定型像に示される安易な貧困をめぐるストーリーをなぞるだけではない、意欲的な実証研究への志向を読み取ることができるだろう。

そもそも久富グループによる「貧困」の規定は、極めて独自のものであることを再度確認しておこう。久富グループは、「貧困層」ではなく、「生活困難層」という概念を用いている。この「生活困難層」とは、母子(父子)家庭、傷病・障害者家族、引揚者家族というように家族が抱える「弱点」が可視的であり、もうひとつの条件として市営住宅に居住する層という点から定義されている。このような独自の規定は、当該書序章で書かれているように、経済的な貧困以上に、生活場面での様々なコミュニケーションの中で見られる、競争秩序を通して「劣者」「敗者」の位置におく「社会的押しつけ」を重視したためと考えられる (p.6)。これは収入のような客観的な指標で明らかにされるものではなく、人びとの属性を数値化するだけでは見えてこないものだ。その意味で、久富グループによる「生活困難層」という概念は、貧困をとらえる上での新たな挑戦であったとみることができる。そして、この「生活困難層」が生み出されるプロセスを詳細なインタビュー調査からとらえ、貧困をめぐる定型像を打ち破ろうとしたことの意義は認められていいはずだ。

では、このねらいは実現したのだろうか。貧困をめぐる定型像は揺さぶられたのだろうか。筆者たちの批判点は本稿の各節で述べた通りであるが、あらためて当該書のねらい全体を考えた場合でも、次の2点を指摘せざるを得ない。

第1に、貧困をめぐる定型像は解消し得たのかという問題がある。本稿第1節で石岡によって検討された、「劣者」「敗者」の「社会的押しつけ」に対して批判のメスを入れる際の問題である。石岡は、久富らの定型像のゆさぶりにおいて、当該書の著者たちが無意識に抱えている、「経験的事実に先立って、『問題者』が誰であるかを恣意的に発見し同定するレンズ」である、〈問題者発見レンズ〉の問題がつかまとうことを指摘する。そして、定型像のゆさぶりが目的とされているとはいえ、何らかの「レンズ」によって、結果として貧困を作り出している当の条件やイデオロギーを追認しているのではないか、そして「貧困を撃つことを目指しながらも、結果として貧困研究が当の貧困の再生産に手を貸すことへとつながってしまう」と批判したのである。

この点は、本稿第4節の新藤による「ヴェール論」にかかる「ヴェール」という批判にもかかわる。久富らの「ヴェール論」に対して新藤は、「本当に教師たちの文脈に即して正視する機会があったならば、またそうした困難を教師たちの苦闘に共感することがあったならば、あのよ

うな定型像でことを片づけられるはずがない」との感覚が拭えないとする。そして、「ヴェールにとらわれている教師」という像自体が、久富らがつくりあげた定型像のようにも思われるというのだ。ここでは、当該書の著者たちが定型像を乗り越えようとしつつも、それとは異なるもうひとつの定型像を持ち込んでいるのではないかという疑念が表明されている。

第2に、本稿第2節で宮内により検討された、調査方法論をめぐる問題がある。ここでは、調査者と被調査者の相互作用に関する関心の希薄さ、調査への関心の希薄さが指摘された。これは、久富グループによる調査が、被調査者を「受動的な回答の容器」として見るような態度だったのではないかと、そしてインタビュー調査データの分析の際にゆがみをもたらしているのではないかとするものである。ここから、定型像を揺さぶるために不可欠であったはずの根本的な調査プロセスへの関心に対して、その欠陥を指摘するのだ。

この点に関して打越は、本稿第3節で、生活困難層の青年と学校とのかかわりを再考する際に、調査者と被調査者の「こだわり」には温度差があることに留意する必要性を指摘する。これは「こだわり」という概念自体の曖昧さであると同時に、インタビュー調査の結果得られたデータを解釈していく際の調査方法論上の問題を示唆するものである。

ここに示したふたつの批判点は相互に関連するものであり、いずれも本稿第3～5節の個別テーマに関する批判的検討のベースとなっている。そして、各論だけでなく、当該書のねらいという全体を通した問題設定を検討した場合でも、筆者たちは、①新たな定型像のおしつけとなっているという問題、②定型像を揺さぶる調査方法論上の限界のふたつがつきまとうと考える。

## 6. 2 応答

もっとも、久富による終章では、全体のまとめだけではなく、ここで示した筆者たちの批判にこたえる、一歩進んだ応答の可能性が認められることに注意したい。この点についてさらに検討することで、上述の批判点とともに、公開されてから20年以上が経過した時点で当該書から受け継ぐべき点を考えていこう。

本稿第4節で新藤は、久富らが調査対象者らに対して報告会を行い、そこでの反応を研究に取り入れている部分もあったことに注意をうながしている。これは、調査とそれを報告していくプロセスの中での反省的な応答から、当該書の研究成果をさらに発展させていくという意図と見ることができるだろう。もっとも、それは不十分であったというのが、本稿の新藤の評価であるとともに、久富による評価でもある。当該書終章で、次のような記述がなされていることから明らかだろう。

「調査の準備・進行・中間報告等の各段階で、地域住民団体との協力関係は、ことがらの認識を交換し、共有し、また深めるという良好な面があったが、学校・教師との協力関係をそういう形で進めることが必ずしもできず、「このテーマで、学校・教師とどう協力できるかということも、単なる技術上の問題でなく、ことがらの認識主体と認識方法の問題として、残された大事な課題」(pp.229-30)であるというのだ。

この点を受けて、本稿第4節で新藤は、教師の定型像に対してどのような働きかけができたのかを考える。そして、イデオロギーや価値観を括弧にくくったうえで、さらに学校や教師に寄り添う取り組みが求められるとする。

しかし、こうした教師をめぐるテーマについては否定的なものとなっているが、当該書終章における調査後の対話の記述を詳細に見ていくと、やや異なる見方ができるように思われる。

調査対象地となったB市の生活困難者団体の集会において、調査結果の報告が行われる際のやりとりを見ておこう (pp.217-9)。ここでは、「金持ちの家にはドラ息子ができ、『家貧しくして孝子出づ』と言われてきたのに、現代ではそういうことはないのか」という質問がなされたという。これに対して久富は、当該書の研究が、この質問者の期待には直接応えるものではないが、貧困者団体を長年組織してきた質問者の願いに応えうるものとする。特に明示されているわけではないものの、この願いに応えている成果として、本稿第5節で指摘した「共同性」に対する代替案があると思われる。

久富は次のふたつの点を提示している (pp.227-8)。第1に、地域での住民相互のコミュニケーションレベルを向上させる活動である。ここでは、伝統的な「共同性」の単なる復活ではなく、地域レベルでの現代的な〈共同性〉の創造という主張がなされているが、かつて活発であった自治会活動、子ども会活動などの再活性化であり、これ自体は既存の主張と変わりがない。しかし、2点目として指摘されているのが、「身近に相談できる地域の窓口」の設置である。これは、児童相談所、福祉課という課題別の窓口だけでなく、全体を貫く問題が相談できる窓口であり、カウンセリング機能を持つものがイメージされている。これは、本稿第5節で松宮が指摘したような、団地のコミュニティレベルの「共同性」による解決を超えた、公的な機関の対応を想定していると言えよう。ここには、社会生活の多様な面をとらえる視点がある。そして、当該書における重要な知見のひとつである、母子家庭における〈第三項〉の持つ機能を保障するものとしても、貧困解決策の新たな可能性を読み取ることができると思われる。

では、こうした解決の道筋はどのように描き出されるのか。本稿第2節の宮内が提案している、貧困をめぐる調査者のあり方と接続することができるのではないだろうか。宮内は、「貧困に対して無知ではなく、ある種のソーシャルワーカー的な知識と態度が、これからの貧困研究における実際の社会調査に携わる者に求められているのではないか」、「そして、その社会調査に携わる者は、自己言及的なリフレキシビリティもまた内包すべき」とする。こうした調査者のあり方は、調査研究というだけでなく、上述の久富が提案した相談窓口のあり方を考える上でも、重要なヒントとなるのではないだろうか。

このように、当該書のねらいの中心である貧困をめぐる定型像の乗り越えを果たすためには、自己言及的なリフレキシビリティを踏まえつつ、調査者が無意識のうちに抱えがちな「レンズ」のあり方自体を問い直すことが必要である。そして、この点を留意した上で、久富グループの共同研究が意欲的に志向した貧困をめぐる錯綜した実態把握と、解決の道筋をさらに追究していくことが課題と言えよう。本稿の筆者たちによる当該書の批判的検討を通じてたどり着いたのはこの点であり、筆者たち自身の研究においても引き継ぐべきものと言えるだろう。(松宮)

付記1. 本稿は、JSPS科研費25590128の助成を受けたものである。

付記2. A団地における20年の追跡調査の成果が公開された(長谷川編 2014)。本稿の脱稿後の公開であったため、本稿で検討することはかなわなかったことを断っておきたい。

## 注

- 1 以下、『豊かさの底辺に生きる』からの引用に限り、文献表記の煩雑を避けるため、ページ数のみを記載することとする。

## 文献

- Bourdieu, Pierre and Passeron, Jean-Claude, 1970, *La reproduction*, Editions de Minuit. (=1991, 宮島喬訳『再生産』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre and Wacquant, Loic, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, University of Chicago Press. (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店.)
- 原尻英樹, 2006, 『フィールドワーク教育入門』玉川大学出版部.
- 長谷川裕編, 2012, 『今日の格差社会における家族の生活・子育て・教育の実態と新たな困難に関する実証研究』2009-2011年度 科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究(B), 課題番号21330192), 琉球大学.
- , 2014, 『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難』旬報社.
- 橋本健二, 2011, 『階級都市』筑摩書房.
- Byrne, David, S., 1999, *Social Exclusion*, Open University Press. (=2010, 梶村泰久・深井英喜訳『社会的排除とは何か』こぶし書房.)
- 林友三郎, 1979, 『おとなは敵だった 増補再販』国土社.
- 樋口明彦, 2004, 「現代社会における社会的排除のメカニズム」『社会学評論』55(1):2-18.
- Holstein, James & Gubrium, Jaber, 1995, *The Active Interview*, Sage Publications. (=2004, 山田富秋ほか訳『アクティブ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房.)
- 平山洋介, 2011, 『都市の条件』NTT出版.
- 乾彰夫, 2013, 「若者たちの移行に寄り添う」乾彰夫編『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか——若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店:9-36.
- 小泉義之, 2012, 「国家の眼としての貧困調査」天田城介ほか編『差異の繫争点』ハーベスト社:241-265.
- 久富善之, [1988]1990, 『「教員文化」に着目して』久富善之編『教員文化の社会学的研究〈普及版〉』多賀出版:i-vi.
- , 1993, 『競争の教育——なぜ受験競争はかくも激化するのか』労働旬報社.
- , 1994a, 「教師と教師文化——教育社会学の立場から」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会:3-20.
- , 1994b, 「戦後史の中の教師文化——それが支え、つなぐもの」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会:200-22.
- 編, 1993, 『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』青木書店.
- Lewis, Oscar, 1959, *Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty*, Basic Books Inc. (=2003, 高山智博ほか訳『貧困の文化——メキシコの〈五つの家族〉』筑摩書房.)
- 松宮朝, 2012, 「高齢者の『関係性の貧困』と『孤独死』・『孤立死』」『日本都市社会学会年報』30:15-28.
- 宮内洋, 2005, 『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房.
- , 2008, 「〈生活-文脈主義〉の質的心理学」無藤隆・麻生武編『質的心理学講座第1巻 育ちと学びの生成』東京大学出版会:191-215.
- , 2010, 「インタビューにおける語りの扱いの相違——ある女性の〈非科学的〉な語りをもとに」『質的心理学フォーラム』創刊号:58-65.

- 宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行, 2014, 「新たな貧困調査の構想のために——日本国内の貧困研究の再検討から」『愛知県立大学教育福祉学部論集』62:123-135.
- 西村貴直, 2013, 『貧困をどのように捉えるか——H. ガンズの貧困論』春風社.
- Said, Edward, 1985, "Orientalism Reconsidered" in Farsoun, S. K. ed, *Arab Society: Continuity and Change*, Croom Helm: pp. 105-122. (=1986, 今沢紀子訳「オリエンタリズム再考」『オリエンタリズム』平凡社:335-57.)
- 志水宏吉, 1991a, 「南中のプロフィール」志水宏吉・徳田耕造編, 1991, 『よみがえれ公立中学——尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』有信堂:3-20.
- , 1991b, 「進路はどう決まるのか——進路指導」志水宏吉・徳田耕造編, 1991, 『よみがえれ公立中学——尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』有信堂:159-74.
- 志水宏吉・徳田耕造編, 1991, 『よみがえれ公立中学——尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』有信堂.
- 高野陽太郎, 2008, 『「集団主義」という錯覚:日本人論の思い違いとその由来』新曜社.
- 竹中英紀, 1990, 「ニュータウンの住宅階層問題」倉沢進編著『大都市の共同生活』日本評論社.
- 樋田幸恵, 2013, 「住宅確保に関する現状分析」『淑徳短期大学研究紀要』52:15-26.
- 打越正行, 2011, 「型枠解体屋の民族誌——建築現場における機械的連帯の意義」『社会学批評』別冊:21-44.
- , 2014予定, 「暴走族の〈パシリ〉になる」木下衆・朴沙羅・前田拓也・秋谷直矩編『最強の社会調査入門』ナカニシヤ出版.
- 上間陽子, 2013, 「調査におけるインタビュアーと調査対象者のかかわり」乾彰夫編『高卒5年どう生き、これからどう生きるのか 若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店:281-311.
- 山田富秋, 2010, 「インタビューとフィールドワーク」『質的心理学フォーラム』創刊号:7-12.
- Wacquant, Loïc, 2008, *Urban Outcast: A Comparative Sociology of Advanced Marginality*, Polity Press.
- Willis, Paul, 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Gower Publishing. (=1985, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗, 労働への順応』筑摩書房.)

## A Critique of the Research of Poverty in Japan (1): Reconsidering the “Yutakasa no Teihen ni Ikiru”

Hiroshi MIYAUCHI, Ashita MATSUMIYA, Kei SHINDO,  
Tomonori ISHIOKA, Masayuki UCHIKOSHI

### Key Words

lives of the dispossessed in the affluent society, research of poverty, school “maladaptation”, public housing, inspecting gaze

### Abstract

This review article concerns the *Yutakasa no teihen ni ikiru:Gakkou shisutemu to jyakusya no saiseisan* (Yoshiyuki Kudomi et al., 1993, Tokyo:Aoki syoten) from current sociological viewpoints. The book was an attempt to break the collective myth of the Japanese asset price bubble, by highlighting the realities of the lives of the dispossessed and dishonored, who resided in a housing project in a provincial city situated in Japan. The firsthand data presented by the authors enabled reconsideration of the discourse’s stereotype such as “reproduction of poverty” or “cycle of deprivation.” However, the book still relied on the common representations of destitution, as opposed to the scientific objects. This article, written by all members of the research project *Seikatsu-Bunmyaku Rikai Kenkyukai*, highlights the false ideas and methodologies used in the book, relating to the frame of constructing the research object, reflexivity to rupture stereotype images, understanding the youth, school, and teacher, as well as ways of research on the social relationships of the residents. In summary, the book reproduces the stereotypes of the residents as outcasts. Finally, some theoretical and methodological implications for the future studies of poverty are discussed.